

中村俊定文庫
文庫 18
519





木く乃去う道下
 冊子列水梨中山餘
 情無云子一
 了志去平雪月忘
 始亦也心本致
 以凡無若所換



定村八情村

後道寺書

中定村



其

よき流り糸の標産
こゝに又真名
笑に果るる

安永五丙申初新

宗書略

遠く輝り玉の消息尔依く
をしふかす清島の條く
かき録すかい付く
わして疑論穿鑿合ふ
いとぬふと師の机亦
口授りて程し
さきし
多う
く
○夫蕉翁の俳諧の聖
を

人ありき昔越の金珠尔竹雀とらつた好人なり今日此
 事務をかこむるると之翁竹雀を招く曰汝事務を
 おろそかする由きく法中おろそか法を守らざる豈に是
 人の道あるんや今もわして三年伽借をせざる世替
 他人の許さん程のりも伽借はさひ志をりを樂し
 一白ありやも子う白を及る尔放てを我門の人を以て
 一と交戒るしときを至行以修力あれハ文を學ぶよと
 知りたりも至く聖日る紀ハ念獄も回一人として羽
 きくくはせざるはこ生進きのあふ追つても何り伽借
 を好むもは、考一ふんき事務ぬらん

○伽借れ式ハま教小做らるるは別小伽借ぬし一ま

中尔伽借のこた教なり白作をせせんとせぬ授もなり又
 甚白の條目ハ一甚れ考く穩々もらん馬は是別もなり
 傍く一白れ扱わく免ともあり一應力くハ分別
 加こ一依て先白作を以へ一え白もく後法格ハ後
 多らるれ白化自在もくは法格を聞ても解る
 用ゆる事一授紙一むす家あり伽を導き教人ふハ
 涼く穿らら正さん事勿漏ぬり今日世業れいとぬ尔志と
 のへく授ふら業を唯一句きりやも後世小漏りても白小
 過りやらん事をのこもきり傍く白化の財もらん世
 云かりきとを本へ帰るあか一先を出る又切字乃
 事ハ予法尔自得と一教習く是を記寸甚白中

扱白格白作す扱少く免す此等十三興子淺
せしを子條く出所堂い一う素只九半一う一乞之
清中く解之面位不本也

一嵐

月日

一か子

是れ事

○古式百韻ハ表十白表八白ハ後形り歌仙 四十四又十韻
源氏采字易 長歌 短歌 七十二候 二十八篇 及び
後人の體式形り又今本式の俳諧少くハ古式百韻
を私尔称き一と形り

○表小神祇釋教急事等名所故事故人の表迹懷等
その他や一き物を忘るハハ遠くハ何り是
是れ大く形り通るるハ加ハ未尔過く亦出所時ハ自然
此一甚面ハくそ尾するハ伊ハ形り依く此境をよく心
得る先連ハ表小若所古人を出一例も何り又表

斗乃ときハ是非神祇釋教意を常を十句時ちふこ
 せし既小甚歎三吟等時ハ表十句少く者れハ麻足
 郭云名所を出ん是又十吟等少意至れハ再遍までも
 とき意ありきし之より八句表ふ少始ぬ一修く他借
 毛裏移り二句少よ一若所意を出んも毛乃は一
 されとも後句ハ一甚此賞する乃とれ事れハ発句若忘物
 うらちもハ眼あこ夫尔從あ重一始る時ハ右忘物裏後
 三四句目までとき意ありを毛乃とらふ奇仙因一まて曰
 表尔回字忌意只之く一さけなり

○附方古式

添 從 一轉 遠付 二句一意

向 對 面貌 柏子 取成付

箒 句 會歌 起悟

大極也式然少も千句ハ子句小て一甚れ公より若句ハ若句
 少く一甚れ其之依て一句く小句意整れハ又附乃至も一句く
 形り何の付れ付と限りつるもれあはれ意を記古れ人ハ
 何を以て句化せしや爰尔公を付し一就きとも表意然乃
 裏も亦月夜の首折を一奉句等れ格ハ此道の法式もれハ是
 を破るハ今日此格を宵中をく一その平句ハ己くハ力力を
 取も亦もれハ三句は時さ一照るもハ及きけ句化も一相
 三句の時を近くきく一先人と自他の二ツを教と立る所り自小

自と續くハ佗の白小仕立時と一む進一終是れハ神
心を導く後云ぬりハ白小依く白佗のせまりと成依て永く
用き事小なりハ三白の精を廣く心得の旨なり

赤越をきのふと見

赤白をくみと一

次の白を習と名取一

きのふと一りくみと一して習をとかるハ已くハ心は候るハ
いつてさつらきむふゆきやを青くして公祠のニツを双
白化すも於てハ丸あやま川車ねん既ハ十三真後白玉雨れ
一やハ平白く種く下ハ一句くこれ時一小仕立より元三白
此時よりさき去婦ふとりも一此れをくみと一のハ子尾を

んがと先の一ツあり

○先達曰都て附白ハ鞠を蹴り如くを得一と一是く一白面
白くこも次の白附くきハ一皮一の尾を有り分て意を多
く扱くも白ハ次の付ハ勿論三白目とも指合なりて若く正之
公言葉の白ゆれハ此とつてハ一既小根白纏ふて時を
忘るれ芽三て留へのまき也

○歳且三ツ物事 是天地人の三ツとわさるる白を

天の對一芽三を人の對を服在地尔わさるる形りこれハ
文字とあれぬこふ於くす支あるき事あり

表面の事

○表句服第三四句目大意を是を待乃起承轉合小
如こころ

起

起ハかこころを此小あめて情をねこー一句を首尾
して仕さる形り

承

承ハうけらる形り前句の句をうけく是小承傳小
とハハ先くり云を承及してそのを詞ハハさるこよ
よと承をうけらるく句を細るをいふ形り

轉

轉ハさるる形り前二句小情を述多々人小ハ氣
を小轉一亦此二句小氣を述べた又此の事
情さるる形り亦附ハ取連の如し

合

合をうけらる前三句の情を引接り只何と短く短く
引合さるいひを在りあり是を合の遠のき人
四句目を短くこころの如くハ大さるる形り句を短く

一三句此大意をハケラる事 等附のちさき小
如し

大體ハ句のこと一物もとも是ハ條目あり 時ありあり後句ありて
色く亦変化あり一物も又形の如し一とさく

○折端の事

一ト表くして終るは是又やうううと公の如くさるや
句此さる

○表句の裏句の事

是表のこころ小けやさき詞をさるして 只やさるる小句此ハ
表とそるる形り

○奉勺仕事

奉の花を爰勺に對し奉勺ハ眼勺に對するも此ハ眼乃勺に
仰をさふ時く揚の云ふ添く候へ一は勺を一を仕候り
それハ杉文ふ公候へん何の細きやうに仕候へ

○眼勺の第三よりとら事あり家々の秘事一私説等ありて
まらしく候り振を字留第三ハて留小多あり候へ一留
らん取あとのおハせざる候と一節ふ公候へハ候りより振ふハ
眼勺はありき第三ハと第三体あり初心をく候へ一は体小ハ
させんか為る右仕格を申す多あり候り一は能く眼勺を此ハ
一旬よく心第三小個ふときハ右の格ハ月候へん及きり後ハ此ハ

切字眼一とき爰勺と差を付く。爰勺あるにや

眼勺仕方概

○爰勺を君と眼一眼を連はと心得附るふ候へん左候や
まの事眼一

乞添添お候り 添添ハ八時節も遠り
元より今候あり 是君より後のをとら
爰勺を三月の也 向ハき事と答はさる

或席あり

この目も来る目を見えする葵哉

砂亦身をまろね 友腰の鶴

此奈白三世此世仕立り観相ともいんり依る白西八丈小
流くす切正の意を扱ひ観お小後て友腰の鶴と付り

○考釋 連歌早下れ付とら

何人家をとら

かくふるす歩の八聞一 部一

友れ古山のいさくき 里

第三の部

○第三をこれてあをことしめ事を傳せ流るるハ

何ともふ藤乃桑葉風流

まう中 右の ^{カタリ} 岨 小田をおて

桑葉文小風流 五ウ中めし

ゆっふ只又文字七文字の下又まゆくき後けハ角けてあを
とゆゆるハ流りとぬりふの字を結もゆハ自然と白
長ケるくさるるぬ小第三少り小叶あり

○第三もね一別条ね一

○第三てぬハタレツレハ通ふてさるるハ留るハタレた

反シツレ反シて終り

我後ハ去年此命取ル迄出て

立出つ事 立出多れし

○第三小留ハナリ小通ふも〜終〜てハ多〜ルナリ反シ
小まり

多事いと〜静けき折〜りふ

是ナリ小通ふの字小留〜ハ通〜し〜子も終ふ小留も〜
さう又ふの字下小ての字は残るや〜小〜し〜依て

をまふぬきく 此去の〜

此の字を中七文字に未も盡て〜
留のわたの〜

自然と終る事終り

○第三小〜反事 度句小哉〜何る第三小ハ〜
通〜し〜是〜ハ〜
昔〜た〜を〜
閑引幽うかとハいこれと銘ハ推〜知〜

○終人の反事 今自れを察あ〜らんハ〜
終ハ〜
取ル迄是れ反終りラムの反シルより依〜よ〜
を盡く終人と留〜

やうくり成性並うてあうらん
羨袴許きうしりあめくはらん

あうらん
あうらん
あうらん

能きとも軽ひの意を上ル並うきうハ軽んの上ル軽ひ乃
字を入く續きハあうりたりハ

人やゆらん ユララン 人やゆらん
水やまほらん まさん 水やまほらん
花やあらん とびん 花やあらん

いほきあくも同し事なり能きともは申す
人やあらん 人やあらん

此やハ軽ひあうれあふとまうれ又軽ひの意あうても一句皆
軽ひあうれハ軽ん留るなりまうハ

久しきあうりのとけきまはあうれあうれ花のあうらん
是ハ久しきとていん控詞あり意ハ風尔なりとてくあうれ
を何とくあうれあうハ あうれあう 花のあうらん あうれあう 車
そと奇一首の意皆軽ひなりこれハルラ花及ミラなりあうれ
花のあうらん今あうれ及ミラをあうらん花のあうらん
あうれあうらん

○服下知の詞のと記ハ第三五段て留まうれあうれあうれ
あうれあうれ

○四句目より

穽八や雪市表道乃はくぬ時
桶乃氷を湯尔沸くはる

船と舟と事漆いく川に浪戸く
物ふゆわ日尔手をりませあり

そをを四句目よりをき云らんう前三句何事とも任まらるは
りり湖くそ四句目尔照りへ物くる公地不仕立たり

又曰月尔日尔月の付くことよりみ如又句目

松を只月名るのこことおまひく不

前八日を神とせし次八月を意お扱ひくは是とも月乃新美
名迹る

月の部

侍曹を月とおち(うさ)あやまり侍曹月ハ意れくは
十四日をこもり目とらハも成倍の得りとあり

○立俗の月を八十七枚月をりあらんといふ説あり

仲心の新ハ

東海のさやけ中山まけくそ意くやぬ舟物よ立俗の月

○指持月をも十八枚の月をりあらんといふ説あり

世の祈尔

柱の戸子ちしあるはの進まれを指持月といこそあはる

○たきゆー 後の月とも十九夜此月をいふ人とも後なり

六姑弁小

君をのこさきふー 後月をいふにやらふもいふにやらふをせよ

○ふー 後月とも一是ハ廿日

續古今恋ホ

移る後一と河村月もるふも建み一事をいつらうか

○月廿九のち越前白尔天象降お傘をぬぐんえより古格也
是等其事一を恋とす一物もやん古一を伝も人あふは白を
答ふも他席此典を傳つて後白もいふた一二月廿九の白尔

恋も〜と初まて〜き 五三〇

さりと〜と又も乃 ぬ〜夜や

け船も古日らましと月もえんさ

月も〜と〜を〜る〜日〜月も〜の〜
の白尔〜一を知〜る〜は〜は〜は〜

○月尔月並れ月事

附中心苦〜と〜は〜は〜は〜
一春や〜の〜は〜は〜は〜
〜は〜は〜は〜は〜

花の部

○幸崎傳より子書ふ

幸壽 此書を花より繕ふ

けい白元と抄るぬり後ふあくとハ亜されしハ大津乃
尚白多しハ抄るるハ篇ハ世多しハ種別と習

花ハ大事ナ物也をわく侍の松と云ふりも面白く

下ハ傍乳ゆへ此句ハ比良杜花よりナ侍テ勝外とハ白

とハ侍更ぬり加ラハ又哉ハ稱羨嘆息の字也ハ種別とハ

是又傍題ありしハあふとハ世に怪ししと奇説をより

幸崎傳受す稱は是後人ハ憶説ぬり

伊賀代名張蕙翁ハ故郷より出づる書おハ翁の筆少く翁曰

幸ハ只てハ人の目少くハ幸崎の坐ハ花よりハ掃き面白き
花ハ花より繕ふくとハせし只思の心く書きし

私よりハ蕙翁曰如借れ目少くハといふハ面白く人考也

一茶の筆ハ此書ハ蕙翁ハ人ヤ我師也花の事ハ志

趣也(幸)事ハ此書ハ只思の心く書きしハ面白くといふハ

一書といふれハぬりハ幸崎を名取也と云ハ天下人皆

賞するもの何ゆへと云ハ一本ハ世よりハ幸壽ハ松

乃風情ハ此書ハ種別と云ハ面白くといふハ面白く

松ハ面白くといふハ面白くといふハ面白くといふハ面白く

松ハ面白くといふハ面白くといふハ面白くといふハ面白く

法格を以てハ解ハ面白くといふハ面白く

六

三

又曰梅花小あはれ花ふら〜と〜さくら〜と〜も梅を賞す
ふゆ所みゆ〜いさく〜さ〜又梅をりふも賞す〜もは〜と
〜記ハ梅花ゆ〜と〜さくら白花の産ふ梅あ〜合はれハ
異り夫の意〜と〜中花嫁さ〜をゆは〜と〜なれ賞す〜
とれさ〜い〜と〜と〜と〜名の花の白地得〜
多〜ん

○花ハ梅の付ハこの事

意の白ハ十の九ハ梅乃白ハ是ハ梅と付ハ梅と白花の
賞〜美を賞す〜り〜行要ぬり又付の〜と〜れ白〜と〜梅は花
をゆハ〜と〜り〜をゆハ〜の白を〜と〜と〜をさふ

梅を付ハ事ハ〜と〜ぬり 十三奥ハ白格
白解をゆは

○花の後ハ白ハ梅の根 花の後ハ白ハ梅子ハ名ハ本は梅〜何
ま〜と〜目〜ハ〜ぬり

○意の産ハ産白ハ〜と〜をゆ〜と〜と〜と〜賞〜と〜と〜白〜
ハ〜と〜と〜と〜及〜と〜と〜

○揚の意ハ初花此心の白〜と〜花十〜と〜頃満〜と〜白ハ仕
立〜と〜ハ白を白ハの花〜と〜ハ〜と〜白〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜香をほ〜と〜白ハの花〜と〜と〜と〜

張り形りけりし香を長くは是又初の香と首尾すまじ也
又白ひの白格白解八十三具爰白意の忠色吐舌奉白中も也
く通す

○遠付

連弁四道通ふけり

よきとよきとよき障子結小幽閑さよ

おさハハハき飼鳥乃音

妙證き引遠へけられや貴国さうさうり

○面乳

葛蒲ぬくもを総あきうきうき

馬上尔有るくも壬かほ如也

前句海善の沼を心尔持くぬきりぬみ実方よりあを
面乳のとりく俗怪尔りひぬあり

○向ひ付

あまをさそひんかそーふき又入

裏口、隣乃鏡えセルくる

○郷音

郭公朽木の冨を出さるん

待々きくく牛の来る道

△天

前白尔待のまをいひ跡し〜多るれみ紅音さ〜り

○起性

乳寝尔月日化形る 買菜
謝意いこま〜流き 灌頂
系身引合〜事性を起〜多り

○拍子

土産さ〜只音ゆく小亭せさう程
今の今まで泣き位 泣き
前白洞の跡り〜をゆるせす〜〜向き〜る〜れ小〜自然

と拍子さ〜

○對付

あま〜〜と池乃清橋に松小すき
る中ゆく 風乃傘

日

馬の尿乃依 吐く〜
物親尔まきき火又ゆる一从音尔
前八親色さ〜き次と親相尔親相さ對〜あり

○取成し

あはれ世小法ゆゑとん乃急少とく
傳しく中尔鉄炮の音
急もれやけくき夜れ及の程
心をけぬうこゝな那しあり

○轉

是を連音小引能くとり

石ふぬくふ蟹ふかふゆふ
勢出しく雷さけけ八極の候
ふきとそこくお流ふ開き取
方二句異形のおを續きれハ心を流く精しあり
鶯のあしをいふと指さしして

小瓶や不しき去年は梅酒
りふら中喜れふさへ漏寺尔
常尔梅酒とあしらん人さま代付り依ておしきと
りお速懐を清く精しあり

修験の相をまゝる温泉舎り
世れさぬ乃鴨あや露れは角も水や
思まかなくも産産ありあり
前々鳴る鳴と續多れを付かきゆるみる是非あま
きとり六かふふ一少終り依て句中お涼く附込て心清くあり

○意

是者之意 公乃意 詞れ意

まゝて恋ハ二句より三句中流る古ハ又句を去る波もくも
かり流る不一句を捨るといふ説きあるよし一は公
詞の恋のよりてりふ國乃を去るまんとす事ハ初句不
くも知るへ一十亦一とハつ恋寄るゝらハ如し一是
やうとれさうと一と

○詞の恋

あつてあつるうゝ益乃月

傾珠を踊の中へ放しやり

是詞本あゝ恋の情如し

○公乃恋

け程のあけ流きひ乳カ細リ

不暖一実るこりり如り

まゝて恋とふのまをりか

依て吉人の句不恋一句を捨るといふは是非前句不
まゝて恋とふ又次の句は自しとあゝ前句を去る亦五
句一とらうとを去るの裏ありてふ付亦句の恋を
あゝはりあゝりて一句を去るを名はれ裏乃句得
まゝといふんりさ如くては恋一句を捨るは理如し

○故事は付し

けさくま聖徳もまはハ何やうん

船のかまやふ眼を閉ぢる
強く乃解出とるもせまひーそ
強くそ故事あかまれとる一白あやの形引
詰し付きり

○軍中事

加茂川を履きて越る又月ふ
火ぬり多く心なる武士
又一人伺候の拵踏し
此の流流きり次一何と云とる事書し

○自他心得事

他ノ事ヲ自ノ受クも能キとも又中ノ人情ノ外
皆指さるハ他より此の心も此ハ己の鳥小如り草木
少くも白きり人情中少く盗人こころの事
是非他も此より

破云ハ

有明の燈火さく志を記家不
瘦子り泣く盗人そく形不
是己の盗入る遠入る白形り
泣子るか形く盗人をし家
と他不能る(きり)又先の白折開ハ付く形不付

焼火之ももはらりあけ子疲るる肥るるいりてあふき

○素春

是三句尔冬のうれをりふ

○素秋

是又三句小月をせらるる

是素春ハ格別素秋ハ変てとととと也む古格ちまきハ
年々一ノ體を表表表も他の二季此月世しあふハその
月ハ付込素秋三句續りるを尋しをり此體乃を
得と及又素春此句格句解ハ十三與変句を此體の先
并登句を此の先とあり

○鳥小鳥

草小草

漢字おふ漢字物

日尔月

木子木

名取子名所

付くことよりり是を述く知る此言り前句鳥を
為月小扱ひあハ次の句をを伴あふと一前句禱
みせしるるハ次句ハ悉尔用也一一都々此言り此句
此す小扱くハ述か一一

有急道を此風乃海つ

南をお舟りるる存る此歌

是亦句ハ風を伴と此次言を伴とあり

産後多産の付し、 宜少雨不登付し、

○ 四字を續ける付方

右何事と名付格句解八十三真及句骨魚の冬、
よる乃をを

○ 一句立する句付方

向ひくハ流石恨もかきくあせ

かゝ家とまきいあ意親のる紀身ハ

昔句を放し、
少き、そ

何示付く意初れも紀身ハ

~~~~~可~~~~~

又回此意向を二句一意も作るとまハ

向ひくハ流石恨もかきくあせ

又何りし世をい何 意まめや

都く二句一意ハ歌の下付句を能くとす、  
此を何りてハそ尾せよ

二字を解し、 かし孫もああふ きせよはあふ

○ かしあああふ うけあああふ 又三三三三三三

さし~~~~~

○ニ字とぬーとらふき

音白たやの字を信してぬる

○ニ字加、運弁の白ふ

老ハキ吐まんひましくハいざ

老の歳と見らうけをくたふ

是名所かいそは歳とてぬる白ぬり

○うけのち素吐白の事、ももまの歌の白ふ

ある秋乃ゆよりを 社 乃ゆ

かゆゆゆ魚を萩乃うハ風

袖のぬかかきと信する白ぬり  
は六つはちふふふふ  
うーとる音白ふとるぬかあり

去嫌の事ハ諸書ふあるとらふも

さ中ふゆ傳へきに傳らる

○音小風古哉の事

音のふたゆとまふ魚ふふ及まらゆゆとある白  
ゆハまぬとらふまは敷く忘



△天

○通ふ詞乃事

くりのこみまふ      くりのこみまふ  
 不と      まま通ふ      だら      入通ふ  
 は類ひあ越の句まゆるらぬま

○足身物ル 氷陽火あ越の得事

氷      エホノ反コ      コリノ反      キ  
 陽火      カキノ反キ      キリノ反      キ  
             ロヒノ反リ      カミノ反      キ  
 霞      スミノ反シ      コリノ反      キ  
 曇      クモノ反コ      キリノ反      キ  
 霧      キリノ反キ

風      カセノ反ケ      ケハ      キ  
 時雨      クレノ反ケ      シケノ反      キ

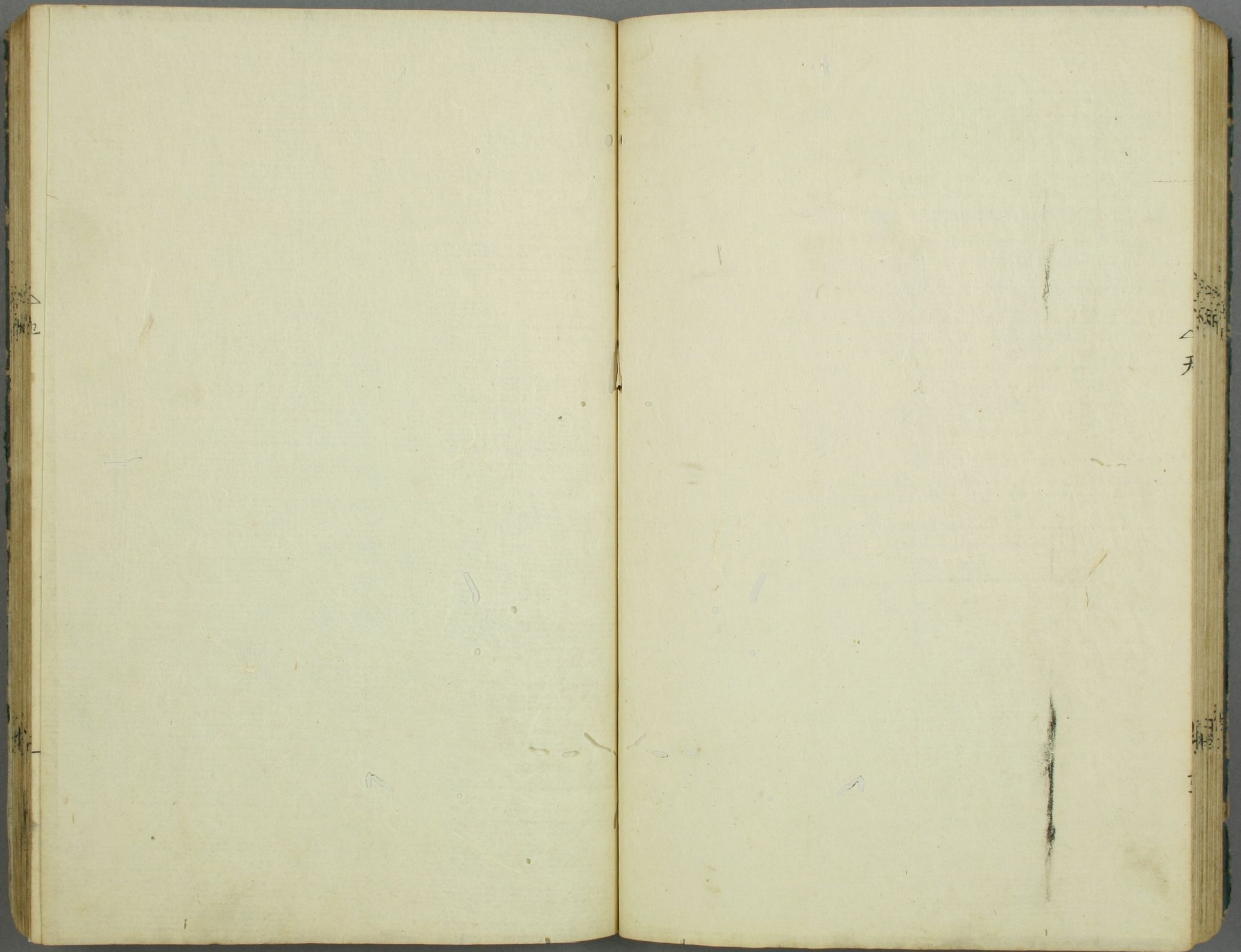
雲ハ曇      シケハ時雨

何きくりあも天地乃事るり句小よりくまゑと

○短句小詞續れよーあーり

四三      三四      三四      二又      何きもよー  
 二又      三四      又二      四三      是也ー  
 初不もき      雲小      鳴る  
 いはくふり      紫人      ね

此は〜の〜きれく〜り詞を〜と〜り



癸白部

○丈伽借を和奇に一作字々其に極氏をを伽借師  
之稱一々々々之れを白の及白小君ヶ代を役一  
之まをううのまのまのれハ形り依々其且其白ハ  
右平を心尔持々身とをのつるをままま

元日や我より介不鬼まま一

十七字を一字と爲す

一々一々一

○むく一八九字に白多一是ハ旋頭片歌と云ふはあり

多しハ集不集不

みよし一冊もそろふはるるる浪

是ハ旋頭弁此上の句なり是も下此句を回く又七も小活て  
三十八云のせんそし弁ももる此ゆへもかこくあるれ片  
歌よりつと知る魚し又亦代四事記といふ書中と詠弁を  
記此中不十七字此句十九云此句なり是を号くナカラウツ弁と  
りり試書ハちか事まきこき世に小流布する古事記乃  
中の字を四十三丁目此表不目本武の令此もも終不活句古事  
記の撰者安丸ももまきこき此ハ片弁ありとなつた玉つり  
依る是を本すそ片弁と唱ふる也片弁此もも句りハ  
まより十二代の之神武天皇よりとらまはるる世の事も日本

武此命乃活句よく細い多るぬ少や

愛し我家の方カタニ從雲井立来意

此片弁命旅ふいましそそるをるゆりくお不し是して  
續玉つる活片弁也是風俗よくそのひをるゆへ右此めく  
安磨は白此下ふされハ片弁也と書出り安磨あり入るも白て  
千四百年のかりを履くり十七字の片弁ハ品一白のまより日本  
武此崩カタニましそそるをるゆりくお不し是して  
活片またらるるも片弁也

活らより活ハめくれ破活をる

中の句ハ六言あれもむしハ四言言つたり依りゆえうと  
ありを引く七言小合と四言のときハたしハ活活のうとあり



を引くも重なるも此は古事記中の卷四十二は末衣ふち  
祭白と八上の又言をいふあれも後述新ひきとりのものな  
そかいらる並申へ後白をいひあるりも並に八上は又云をいひ  
紫集おあがり服の幸ハ懐白と云々  
紫集集  
八上目出 今云 俗後事結を  
りよのハ皆上代より乃細ありかたり古今集より後述新白とあはれ  
ハ七百年一古事記はつこのあはれと今の事結ハ上代よりい  
ゆるれハやとり今までのことなり白のさまおれつる白のあはれ  
ハ昔もども詞をかたしと知る——その中一也

ま——吾我は方從 聖井一立来也

とらふ白の敷う細今とらふひも私をれともう——れと——を  
かりきよ——れよ——をや——と流の——きや——の白もてま

まの假形り家とハいの詞を聴——まの細あり後とハありは返——  
イ之依——ヤイエエヨは返——音あてユと云聖井は井をけくまや  
まの雲は幸——をれと縁あま——ハまの——より立ある——聖も  
まのり——くま——あはれはまの地もや——まのを交る——  
ま——聖の孝今れ白もんそ是かか——ん

此條とらる人よを授き——まの館小

かり——を定ふ也

白化を得の事——

○中程の仙傳ハ越々々々後より化を求付——りぬ小傳てを

竹節白附小落さるる白きまき一今蕉門と稱する俳仙ハ詠白  
を主候小句化するハ如尔亦奇詞を扱ひ多る白句を撰りて  
奇句を連発す意云々き句も有り私小句を俳諧少き  
詠白を云ふハ於てハ自然と俳仙の詠白出づルハ表々ヤリ  
きく白句も俳仙の如く供まり

藤、ほろほろ落さるる花の如く

あまのふもくろくるとはて事

○四季を分ちたるハ春白は冬移り春ハ去夏ハ夏と云り  
まゝと云ハ中ハ正月より二月ノ間ハ三月の二月より四月ハ

そのまじり

茶摘とすは春 秋茶とすは夏

秋茶とすは秋 冬茶とすは冬

此歌四季のまじりたるは秋茶多るハ初を賞するは理りを  
以て大概を知りよりハ秋茶の如く又曰秋茶牡丹は  
三月ハ候神の葉木槿ハ六月ハ候秋ハ八月ハ候神の葉も  
夏ハ冬閑なるものハ冬とハ牡丹ハ暑けるは秋ハ冬とハ  
木槿葉ハ自然と秋葉に供りて冬とハ冬別先哲乃風流  
歌味と云ハ事ハ形り依て格を格と云ハ只句化の如くハ  
よハ牡丹ハ冬を季を継小ハ秋牡丹の陰形と云ハ句調と云  
ハハ冬ハ中ハ冬式人の俳諧ハ山依を春と云ハ秋ハ冬と云

野山小斗ものを指く山依といり今山依と稱すものハ他  
驗の者もれハ何そ取をみ辨あらんや既今今りの舞まき之の  
本様ありといふまゝいま本様を舞とりつてと西をさするや  
一此類ひいゝもくもゆるん地も小山依のをいりあへん乃  
事ふるゆりゝゝ夜ふとりあも穿るゝゝる辨あらん

○発白ハ類とほるもの互依て同季れもれ舞ツ振あも舞ハ悉  
月もれハらゝゝ一かゝれ既小雑の後白といりあも神紙名取を  
換振返答返悼れ類とをを舞をせんまれハこもれあ季節  
を加つゝハ手附を知ゝゝむる乃用之又季節ニツ振さる白り  
手き舞きのあきとを是雜体といり能きた是も何れの大さあ

了柳ハ柳のこ梅ハ梅のこ少く仕まるとををささると何れハ一又悉を  
振あもも吉れおくゝの舞も少雪舞も少略も少を能ひてそを  
ありゝゝ福意れ舞ゝゝきもあ月てて之自然と自然不申あ  
ふりあもあもとのこも下舞ゝ

何所もも小只正月乃柳ゝか  
きのあも小 咥ハル梅の舞りお  
りゝゝ雪もあもゝ透くも舞哉  
又月もや古井の舞ゝゝいゆ  
略 去ゝゝ曲もあも善ぬりゝ

○舞とほるものを上れ又文字おかくと下れ又文字少並とに





素書問

翁答

是非多し

吉来問

全

奇し妙し

惟然問

全

彼名各切し

答ハハ六ツも此より三ハ三ツ

造りしとも容易此事を解く秘を初よりありてハ解し  
也こし先切字ハ一ウ切字切しウ切の字字しふを統小切字  
りし事まり秘をハ切ひのや治定此やとや文字ハ二種あり  
きや先切ひのウ切小並ハ切ひのやと成先を切字とより  
小橋ましひとぬるかな一字形しきもウ切とぬるハ切し  
予先ふ心を用ゆる事一安尔事有り漸くありてそを原  
を知

○夫今日心詞を發するハ理在形り依て切字は其を教多し  
也とすも理在の事ハ形りハ端あり先尔はくも形入  
切字の習ひとくハ多去未來を現在をそを属し留ると切ひ  
を治定も其此二ツ外あり又治定も此ハ現在に依りて  
之理在の一ツ亦此の先も自得するも形りハ其何乃形  
ひらありん又此事ハ形り其れしてハ第一宛のウを則し其

蕉翁六哲ハ此答ハの解

○蕭ハ是此を分るなり

又名ん少く揃ッ下へい其の如く  
是の去をうけく現をある

又名ん共くさく吐花の比  
是又現をとり来来をりふ

行ふと現行ハも少るッ蛇牛  
是行ハとうこのひと初らつと現を蛇牛ヲ對しりふ

○奇の妙し 級名各切し

又おろとハも少るッまでみ雪の里

是正も雪りる切字なくして後句と成まり是尔之縁あり  
雪のの字連なり格字ヲ對し雪のとのの字よりみいふ

あまのさくし少初動するハ級名四十七字何きあふも同し  
えたり一句現をあり

○盡し 一百の如きあり

さりさくハ人も麻させん火とり虫

是と現をのまを如初十七字ふりひ画して如然ある句ふ  
拾へい句切切字は論をり一既小石のぬハ石切といふハと吐字ふ  
る少故にけ句人も麻させんといひあをり白も如き難す  
き可如し一是もく現をさへり又曰

元日や萩の淋しさ意常あふ  
化し野のあふさる菊<sup>キク</sup>えり日か

此や我呼出のやわらひけを称羨歎息あといふ是  
現在より少事一ふん付する人の句は上りく端一ふん付くあり  
やふ事哉ふと拘るありは只夜の淋くとも常なる元  
日又化し物ありともさうさうと日といふ句もやもかも一句乃  
即彼あり

切字は本原より只現在をえうして格字と成り又一句成然乃  
亦多能を多る所此三ツを余得するに於てハ湯つ事かして格字  
引合此乃これくの句格を契り能ス

発句平句の差別

○ 平句ハ切字扱きあり  
及句ハ切字扱きあり  
此句は平句ハ切字扱きあり及句ありと云ふも  
あり又切字ありて自然ハ発句と供りてを知らん求て切字  
を入るる句あり

○ 切字扱中ハ平句ハ一句は句のといふは依て神心これを知るを  
意にききしハ一句ありとも免れしきや是句はの難きハあり  
是ハ一極ありそ尾せしハ押ハ抱ハの字もてあはれあはるる  
是句を能くしんかんとせしめ既ハ蕉翁の仮名四十七字ハ皆切字なりと  
云ふ

△地  
○異体の勺拾それ〜此後なりといへども是白字を授けられたる也  
あゝ小束〜字を解〜一〜何〜八十八九のふふとなど求むるも  
勺面異体小字なり〜多ハハとて悪き極白字能白小成りも何〜  
只通用の切あ〜十七云は白あま〜ハハ

○白切大繫を得〜事

何〜と送り〜白 上又文字あま造〜物を並白  
一白現を小留〜白 切字をりひの〜一〜事〜白  
細を心〜持〜事

此又ソ何事〜作事の切〜白〜一〜白〜一〜白〜一〜白〜一〜白〜

○白中小願下知の〜白事

是下知ハ未未形り物〜を現をり〜してソ〜白〜中〜  
白切〜事〜事〜白〜一〜白〜事〜白〜事〜白〜事〜  
此〜白〜事〜事〜白〜事〜白〜事〜白〜事〜白〜事〜  
此白叶〜と下知〜事〜白〜事〜白〜事〜白〜事〜白〜事〜

○下知 へヨレソ子ナケテメセ

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| へ | ふ | ろ | え | へ | ヨ | レ | ソ | 子 | ナ | ケ | テ | メ | セ |
| レ | キ | ハ | ミ | ヨ | ヨ | シ | シ | ナ | ケ | テ | メ | セ |   |
| 子 | 花 | 心 | け | 結 | ナ | 花 | 心 | け | 結 | ナ | 花 | 心 | け |
| ケ | あ | け | あ | 〜 | テ | 花 | 心 | け | 結 | ナ | 花 | 心 | け |

△地

十

今

メ 鹿の山

セ ちとせ月

○ さきさきの詞次第を

用 さいむハ

用 ちとせ月

右 さいむハ

雨 晴きく也

左 さいむハ

人を 控る也

留すさむき

那くさむき

○ やハ かい先や

此三ツを心を裏表小用をさすはあはれ

連所

さきさきの詞をかいさむきもやハ

さきさきの詞

今 せきさきふりて連もやまんにれおハ

やれおんおん

全 よしきくさむきおむひ控もや

控もさむき

○ そ べよ あふ かつ いく

まて 数ひハ あさきく 押さへハ 治定ふか

さき身そと 山を降りと ちかをさむと

○ 足ゆ留 是をさむか ウクスツムルシ

右の字を足ゆ留ハ 止むと 自然とあまに せふハ 足ゆのさき  
人が此二字をさして 吟く ちか魚

第一川 ことさく 半しをさく 足ゆ

又 ちかめ 下ハ 何とあも 詞續くけ ちか ちか

今

やの字は事

○まてやの字はまて八切とまて入るまて一は白尔よりく  
る切る亦尔よりても切まて

角乃や 押入るまや 控や まてや のや

に合のや ころむるや 中のや まてみのや

此も切もあつて依て句はなり

○控や 是十六まて一勾の對りひ控して下尔是加控やなり  
むけや上又まて末少まて七文まて末少まて

月ころ中ハ月經るうううまて夜や

又上又文字は末少まてをのうやとりまて又まてやとりまては事

ハや外は末少まて

○中のや 大体上より八九文字目より

衣拵るや 張麻乃 控る

お初對をーお中みまて中のやまてまてこまてみのや  
いあ一勾の切也衣拵の亦よりまて一名とのやとりまて彼とまてと  
しふとの字もまてやこ

○類のや

えより切も依る一勾中みまての字は押入るまてハるなり

まては雪さるハ花やとまてまて

△△地

○首のや 上より白き目なり涼しやとあふやの歌也  
 不切是やの字をゆるぎなくしてとの字あり押へるは小押へ  
 為すやとせしむ此句切意類のやとあふと此字を添て切こ  
 ○口合乃や 上より三字目や月や花やの歌し切也

一勾ふや哉扱ふ事

○都て哉取のよみ重や控やハ端ふしそかハとれまふまふ  
 や少強るとゆはし

蕉の前の白か  
 夕影や秋ハいろく 此 歌うま

此句ゆあまハ秋いろくの歌取とりあふまふを控やし

化し一跡やきもぬき 風よ 芒スミキうあ

け白化し一跡ハとまきハ平均あきさうたぐ

○名所のや歌とりよ 三芳野や 佐よしやの歌く

此やをのく字ハ西よやといふ結まも十句ハ中よりけうこ  
 まゆくそんあささる事あり既小前の白若あふせあり結も化  
 一此のよもるたぬませむと一そハ一句のよもあささること一  
 依てまもものよもあふとらたし

△地

哉の事

○古来哉の扱ハ現在迄を此の切手並を布きし

古人の句  
篇 是をけしこきとる乃林の如

是を此の句と見る之より一白眼亦有り去ると思ふ此の句を  
ききし一か函か送る事如と執く是の爲りゆき一急みそ  
と云わし一又此を林其林嘆の文字あるといひ一暮あか  
白あつた又なるの二字を添へてあつたといひ一限をききし  
其く句の上を添へてあつたといひ一限をききし  
校あつた中かきし一か暮あか一節のどの句ふあつた  
くあつた後の句を呼出たの義あり

○カナレ反ニカニ扱ハ哉ハ扱ひ小限るといふ統あきても  
カノ字並西ルより一扱ハ

花のさつさね

又曰扱ひの扱蕉霜の白ふ

神午一尔扱の扱

是一白扱ひあつた一扱あつた一扱あつた一扱あつた  
のさハ白扱あつた一扱あつた一扱あつた一扱あつた  
扱り扱り一扱あつた一扱あつた一扱あつた一扱あつた

又蕉霜の白ふ  
用の身ハ竹斎尔扱

是一白扱あつた一扱あつた一扱あつた一扱あつた  
タルに扱あつた一扱あつた一扱あつた一扱あつた

△地

△地



古人もルカナハ難しと云ふ所の取ハ又ゆるかハちゆるり  
 五ふ又空く外空キ卦之言クイキク外五ふハい  
 ありあも不留意てるる我ヲして治定之理をこ  
 杉風を下り聞夜のなきさか

○モカナ  
 何事あるの詞の陽る 以出生の一字に  
 字のり候ハいひが 西り候まハいひり候り

○かも  
 類ひこ

名月や雲ハ裏かまかよてかも

○のら字

類のり そふり りふり の類あり  
 控り 思ひ候一り 友と名一り の類こ  
 てふはのり 爾記ス

○ての字 ぬみあるハ弟三少記ス

又上又文字の末みるハ五切中 七文字の末みるハ下又  
 よ字あり候るその成は切る

生涯に酒のこめて定念佛

△地

〇て留の短句

きくさくくあり十字目をとむ字ありく押へる  
生くくちんりたぬそのりて

〇あゝあ をともうぬ

け字をまゝくありてとる 是を物へてなれとらふ

世中乃好をえかろん 住る家ありて

又曰生進付のあゝくぬり

閑りあり 函りあり 一ひあり 遠りあり

〇あゝ短句 是き句ハ第三のあをり

七文字くの末ふにをよははり

連弁

後ハ袖ヲ 一處 一處 一處

あハもれそふ後ハ袖ハ是一ウそ尾へて耳ふとるゆり  
蛇句とて 是を直さくして首尾す。時ハ是れぬふ頭を括く

くあ 後ハあり 初瀬を出し一ル

まゝくぬとぬ尔括く也

〇後留

是き句のあをり 短句ハあをりハあり  
又一説ハあをりハ二ツありともあり

石 後ハあり 後ハあり 後ハあり

〇はゝ長句

上ニヤあり ありの字をて  
中ニこの字の押へを重てあへ

△地

連前白ふ

急ハキク<sup>ク</sup>交<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>形<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>レ<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>み<sup>ク</sup>?

結とも<sup>ク</sup>形<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>一切<sup>ク</sup>不用<sup>ク</sup>ト<sup>ク</sup>

○<sup>ク</sup><sup>ク</sup><sup>ク</sup>互<sup>ク</sup>短<sup>ク</sup>白<sup>ク</sup>

帆<sup>ク</sup>下<sup>ク</sup>此<sup>ク</sup>等<sup>ク</sup>小<sup>ク</sup>船<sup>ク</sup> 覆<sup>ク</sup>ひ<sup>ク</sup>法<sup>ク</sup>、

法<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>事<sup>ク</sup>古<sup>ク</sup>来<sup>ク</sup>諸<sup>ク</sup>説<sup>ク</sup>函<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>形<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>レ<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>大<sup>ク</sup>振<sup>ク</sup>佛<sup>ク</sup>法<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>佛<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>レ<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>神<sup>ク</sup>屋<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>法<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>神<sup>ク</sup>お<sup>ク</sup>わ<sup>ク</sup>ひ<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>お<sup>ク</sup>持<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>法<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>毎<sup>ク</sup>時<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>邊<sup>ク</sup>分<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>想<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>

石<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup> <sup>社</sup>弁<sup>ク</sup> 雪<sup>ク</sup>降<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>形<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>山<sup>ク</sup>  
早<sup>ク</sup>ぬ <sup>全</sup> 雪<sup>ク</sup>降<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>さ<sup>ク</sup>あ<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup>古<sup>ク</sup>社<sup>ク</sup>山<sup>ク</sup>

ふ<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup>取<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>石<sup>ク</sup>切<sup>ク</sup> 早<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>取<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>石<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>字<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>公<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>  
お<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>切<sup>ク</sup>

三世れ差別

○<sup>ク</sup>過<sup>ク</sup>去<sup>ク</sup> 石<sup>ク</sup>切<sup>ク</sup> 現<sup>ク</sup>在<sup>ク</sup> 切<sup>ク</sup>レ<sup>ク</sup>ニ 未<sup>ク</sup>来<sup>ク</sup> 石<sup>ク</sup>切<sup>ク</sup>

是<sup>ク</sup>亦<sup>ク</sup>少<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>互<sup>ク</sup>互<sup>ク</sup>去<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>不<sup>ク</sup>扱<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>現<sup>ク</sup>在<sup>ク</sup>少<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>互<sup>ク</sup>互<sup>ク</sup>依<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>白<sup>ク</sup>  
の<sup>ク</sup>切<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>互<sup>ク</sup>互<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>又<sup>ク</sup>未<sup>ク</sup>来<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>今<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>未<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>あ<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup>扱<sup>ク</sup>少<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>現<sup>ク</sup>在<sup>ク</sup>上<sup>ク</sup>不<sup>ク</sup>  
あ<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup>も<sup>ク</sup>あ<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>ぬ<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>

○三世れ一

△地  
△

過去

乙ーミタ 用ーキイタ いひー イフタ

漢ーサイタ ちりー キツタ 鳴りー カリタ

走ーキ 迫ーキ 白ーキ

ちーキ 奪ーキ うーキ

現在

まー ー

未来

此連もへきあふふ連ー現在なる所切也

きくー 心ハドー いえー

此河ハ濁きも 現在なる所切也

月ー 花ー 時ー

此類の体字ハ多くて偏るー又いつくハ所之ーハ体字

涼ー 在ーハ 涼し 在ーし

体のー文字を心ハ持ク加ハ切也

○三世のらん

心 <sup>たのしみ</sup> 心 <sup>たのしみ</sup> のらん 心 <sup>たのしみ</sup> のらん

是い作と類ひく外山の花ハ散りぬる 早ぬあて現在なる也

現在 <sup>今</sup> いふれハ初と人をさあらん

こーはらん <sup>今</sup> いふれハ初と人をさあんと指定されハ現在也

未来 <sup>今</sup> いふれハ初と人をさあらん

あうらるる <sup>今</sup> いふれハ初と人をさあると現在なる也

○かき締らん 是夜ハハらきとも今ハ不羽と

<sup>き新</sup> 是そくきとぬらんそはく白らん

○けむハ 色去 有せハ 現を せんハ 未

物きとまゐるんも扱みく 難ひ小もあふぬ云ハ

草ハ萌らんハ 是ぬるあく現を有り

まうせあゝるんハ 怪と下知してたゝるんと難ひらん

○く締詞 えん 締ん えん せん らん

何進も未末あゝるん小不切是を一字とこの物とらハ現を  
み取りるんをり小白格ハ六指く答の所あゝる

ケラシ留 ケラシの反ーケリ ケリ反シキニ

○ケリ留 出生キノ一字ニ 何きも色去ニ

キ 留

銅猿の糸と川老より 枇杷の糸

又よりあハ七文字未末をニニトあく押ハ又多りの既尔  
にの字を垂てりりとあー一結きを自他と現をみそ  
危しとあふたけくハ海かー

物歌乃 咲不と咲くられおろり

風のいつかもなしふ止みふあり

○タル テアルニ テアの返ー夕ニ 色去ニ

<sup>古人の句</sup> あふハ又土をほめくも雲間外

此の字のあつてを尋ねればこゝに依りて取を有りタルを定ル  
扱ひしハ古人もあやまきり増くあつてを教かきりか  
〜んぞ〜

○タリ ㊦㊧㊨

最のりあつて〜とまふり切〜取をあるハ勿侍あり

見て居れハ意ハもき〜り初侍あり

姑らりタリふあ〜の意ハも素水り〜初侍あり〜も何  
の〜切られ〜の意〜あ〜や〜るあ〜

○その字 ウクスツヌフムユルウ

け音あ〜あ〜法ま〜ま〜の字ハ都〜韻音られハあ  
〜の〜あ〜キの字〜あ〜又〜も留ルあり

- ク 枯風そく ス 疎〜まま
- ツ ツクそく ス 又 又〜ふそ〜ぬ
- フ 人か〜あ〜ム 風そぬ〜
- ユ 身をそあ〜ル 袖そぬ〜
- キ 人そ急〜き 年そか〜ん

右長句中文字あ〜も同〜

そと押ハ〜ハ皆むの字あり

○あその何 エケセテ子へメエレエ

△地

是れは... 支々中ふへハエと... 音便あり

ヶ 日けくこそゆふ せ 筏了也とせ

テ 月をよそまゝ 子 夏こそハる

へ 押を丁也也 ヲ 此れ也とせ

レ 夜二也更ぬま

是も古句中七文字ありと同一

さてその字又あはれ祠ハコノ字あり押入まハ段を小田る

又あはれハまの字あり持合されハ... 留る也

浮世行を此御に也其ハト...

破々家ハ教束して二也神一ウ...

知一ウ程されあり

○とれまの切

是れあふありてしりあ相こあり...

さへハさやうあり...

富めぬ里ぬり向と略乃...

○とれまの切

燕の古くはあふ...

盗人の花ふハくれと紙衾

何事にも押し下り又文字を...

△地

△地

○何くも送りしる句

孫のまじらぬ久るかこみ鳴子も

是ををぬく川をゆても詞を送りても治世の切

○十六のふふ葉の句

いましハ振もき世を世閑あり

振もと語りしるもく是非らん海

○十八のふふ葉

是切字を云のこたふに  
一名ふふふ切とふ

風かくハい流を世の鏡月

かふる月そと海く聞句は白い何を夜明そ秋月と

てハちくハ根ありしるふれ也

あふふふ今とくしるを根乃草

熱してふ文字小都を世若き又文字小云結するゆを

並に治世の切とくも又文字の下ハふふふやの字供りしる

○十九のふふ葉の句

並に世ハまも危き世乃玉

家のまもりしるふ句也

○字路り

紙燭やうとるハ海くまきつへ



△地  
是聞ぬきりり〜はぬり〜らぬらとよみてと遊せ〜  
ハるりと聞よとの用也

○とねまの 一巻〜そやのてあ〜らふ  
是切字ニツまをりふよ又文字小現在の一〜是中七文字  
みその字やの字の〜ちを並下をを移る也

○近一〜今夜そ月のを能む〜ん  
切字ニツまも一白の切ハ現在の一〜ぬりニツハ一白乃  
用ぬり是尔方事〜まぬりニツ用ふま〜る扱のふま  
そ屬と及又三字切発白二字切發白と〜らま扱扱と回〜

△地  
巡一〜まふ系

○回一〜ま返一〜てふとまゆら

久〜の竜まふまはハか記ものを  
何さあ〜もよみ字ら申七文字一〜るをりふ又曰出合〜  
候〜をの字切〜らぬを記ををの字下〜やの字を〜云  
の〜ら傳〜ま〜て草本〜候ハるたものをやい〜てを  
お花をよ〜ら花と〜らむるをり〜らり

○大廻一〜

け 雲け 系もて たも〜く 兼とひま

急ぎてゆくゆく此雪の巻と云  
を巻と云ふ事とたゞしくは雪は

少初何事にもまゝなるをいふ附句あり

おちて冷る竹のそとこ乃

然るも也一の言葉ありも句を依て也と云ふ聞句あり

涼一さやけは風ふぬまゝなるとも

好ふふぬまゝなるとも清まるともこりあり也

三波切の事

○都て上下、急を並中の七文字不勅く急を並也

亥八日 秋ハ急音子 雪乃寺

是一段く亦段なく多、亦切よりく二句と云ふは也

又素堂深倉あり

月ふハ急音山ありきんを以難

とふを能句と云ふ故ふ又七又在文字あり清くをいふ

之ハ一もまよ一在ふを限るは急音三波切の句ハ

急ハ細柳ハ急を時津風

又月雨ハ嵐の松風 谷乃水

○ 急又地又とりの事

急又地又とりの事



何事も押迫——これ八回——我々や々の事ハ句作れども  
もろくも記さるる私を今日此句の如く扱ふ所やまらぬ

○名所の句格

三芳野や雪と松の隈りあり

花は山を渡る一あらし

山や雪のうきこ乃松と那

死伊勢白子や——松大池に松と松と

- 祝詞 婚儀 卜居 別業 留別
- 送別 追善 追悼 懐舊

右巻の心の弁か——句格ハ諸書あり小略す

○壽句の心得り

又十歳 六十歳 七十歳 八十八歳 夫々差別を論じ

又作、解るる聖ハ夫より事を告ぐ也——

又十歳の聖

人文亦公の花を又十より

八十八歳の聖

山は雪と松の隈りあり

又十歳の聖

家今年に花を又十より

○年忌の事

是又一周ニ々周三周ナリハ又十年百年世れくの  
差別ナリ

又逢ふ如人の進陣如も事も取り去るる事ハ  
そと人小對まきり

如もまきりし事も白をまきり

も少くもさるる如人もハ

り何々皆生啼りしゆく身ハ

之の三十三年在り如も白をまきり

花忌のふ如ゆりし忌日卦

信子鬼貫又十回忌

又十佳生まぬ先れありきりん

わふろの事

○いほきもろくハニまろく今日扱ふまゝのろくわろ一借  
 まろくを利のまろくろくわろくいままろくわろくはろくわろく  
 まろくはろくハアヲヤナキをわろくろくわろくわろくア  
 ヲヤキとはろくろくろくハもろくわろくろくまろくわろくわろく  
 へろくろくろくハへろくろくろくわろくろくろくろく

豎留末字

横歸本行

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| ア | イ | ウ | エ | ヲ |
| カ | キ | ク | ケ | コ |
| サ | シ | ス | セ | ソ |
| タ | チ | ツ | テ | ト |
| ナ | ニ | ヌ | ネ | ノ |
| ハ | ヒ | フ | ヘ | ホ |
| マ | ミ | ム | メ | モ |
| ヤ | イ | ユ | エ | ヨ |
| ラ | リ | ル | レ | ロ |
| ワ | イ | ウ | エ | オ |

横の返り方

タレの返り方



豎の返り方

カキの返り方

カキ

ニナの返り方

ナニ

○ナムアミタブツ

ナマミタブ

ムアの及ーミ

ブツの及ーブシ

○ヌハイタ

ナイタ

ヌハの及ーナ

○ノタマハク

ノタマフ

ハクスの及ーフシ

○サヘキル

セク

サへの及ーセシ

キルノ及ークニ

○アリク

イク

アリの及ーイニ

○詞の事

交ラリルレロ此ニ音よりして初とある故小き初ハ初體用合  
即のみつふるまれを綴り合を何川ふふ初くハ千の量  
此初とあるとりとある此みつよりあると知る

初 シヨ

初 ラン

體 タイ

體 シリ

用 ヲク

用 ル

令 ケシ

令 レ

助 タスケ

助 ロ

凡勺此の申もあらん故おもひあつる所也  
猶右亦出さる勺くすも之勺格を知りて  
あを合せし野勺をかせしを以ハ勺於ふし  
あし尔心をと光路の廻りて

角鹿齋

一籠取

隱居

